

## 年頭所感

オバマケアと未病ケア  
(一財) 博慈会老人病研究所 所長  
第20回日本未病システム学会 会長

福生吉裕



新年明けましておめでとうございます。年の初めは気分のいいことから話します。なんととっても嬉しいのは昨年暮れ、和食が国連教育科学機構（ユネスコ）の世界無形文化遺産に登録されたことです。少々コレステロールが気に出し始めた私は和食に比重が偏りだしているだけに我が意を得たりの心境でした。うまみを元に和食文化は多岐にわたり懐石料理や寿司、鍋など日本人の生活文化だけでなく精神文化にも深く染み渡っているからです。その時々季節の材料と器の粋をこらして造られた日本料理に箸を入れる瞬間の感触は悦楽の境地といえます。この芸術作品を腹に入れる至福。登録は日本人として自身と誇りにも大いに繋がったのです。

さて、日本人の誇りといえは国民皆保険制度があります。これも文化遺産として認められてもいいのではないのでしょうか。新年にその策を考えてみましょう。

【国民皆保険制度を文化遺産に】

国民皆保険制度は1961年日本が世界に先駆けて成し遂げた快挙

です。後世にまで続けたいと願うものですが、どうやらイエローカードがちらつき始めたようです。中には崩壊寸前という識者もいられます。2012年では総医療費は38兆円となり、2025年には50兆円を越えるという推計です。国民皆保険制度を“健康の城”と見なせば少子高齢化による人口構成の変化、高額医療、TPPなどは存続を阻む“黒船の到来”といえます。さらにこの皆保険制度を支える大黒柱である健保組合はその8割が赤字です。確かにこのままでは立ちゆかなくなるのは自明の理といえるでしょう。

#### 【近代社会保障制度の空洞化の一因】

この国民皆保険制度の原点を辿れば19世紀のドイツにたどり着きます。この制度は当時の宰相ビスマルクと大病理学者であるウイルヒョウで練られて創られました。そもそもこの制度は社会弱者である病人を社会による救済制度です。そしてひいては国を経済的にも豊にするという発想です。これは当時としては画期的な発想の転換であり大変素晴らしい政策でした。そして大ドイツ帝国にまで発展します。敬服に値します。ここでまず肝心なのは病気の定義と病人の数の設定にありました。病気の人が病人として公的保険が受けられる制度の誕生でした。一見当たり前の様ですがこれが後になってジレンマとなって来ます。なぜならウイルヒョウによりなされた病気の診断は顕微鏡で細胞の傷害を調べて下されてました。ですからこの数は限定されていると考えられたからです。少子化もなく提供する疾病保険額も想定内で収まっていた。

#### 【10倍に増えた病名】

1880年当時病気といえる病名数は約2000件ほどでした。それが2011年にはICD分類によると23522件に膨張しています。保険でカバーする病名が約10倍にも増えて来てしまったのです。このことも注視しなければならないことでしょう。“病気に成れば保険でカバー出来、安心ですよ”的発想は今や社会保障システム上、分岐点に来ているのではないのでしょうか。生活習慣病については“病気にならないようにするとインセンティブがある”というパラダイムシフトが必要でしょう。その概念の導入になるのが未病と言いたいですね。病気になる前の時期である未病を認識して、そこから自己努力で身

体を管理する人にはメリットがあるシステム作りです。

【オバマケアに参考の余地有り】

この意味において意外と合点できるのがオバマケアと思います。日本のメディアでは冷ややかにしか報じられていませんが、あの多民族の合衆国で皆保険制度が成立するには困難を極めます。壮大な公平性の下に選択の自由度も加味されないといけないからです。手助けするのは技術革新です。それが ICT であり、ナショナルヘルスレコード (NHR) システムです。国民一人一人の身体健康度を元気な内からビッグデータとして共通財産として貯え、情報として活用する技術です。さらにオバマケアの鋭いところは保険の種類選択が可能である所です。ここも日本と違うところです。自分の身体は自分で守り、保険も選択が出来る所があ国で進化を遂げた社会保障制度といえます。日本もグローバル化という多民族化してくる環境です。相撲は横綱が外人ですが形態がうまく維持させています。これと同様に国民皆保険制度もある程度の変容を受け入れ、継続をさせて行く時期に来ているのではないのでしょうか。

進化する ICT 技術やスマホ技術を活用することでウォーキングによる体重管理、サプリメントによる健康管理などが出来る時代です。これらにインセンティブをつける未病ケアはいかがでしょうか。医療費の抑制に繋がります。消費税を闇雲に上げるよりかは得策と考えられますが。